

1. 調査概要

平成5年10月から12月にかけて、学部昼間コースの講義に出席している学生を対象にアンケート調査を実施した¹⁾。設問は全部で30問あり、学生の生活、入学、学科、出席状況及び科目群ごとの授業評価に分かれるが、量的には授業評価が全体の半分以上を占める。項目によっては意見を求めたが、3/4以上の学生がなんらかの意見を寄せている。回答学生数は576名で、これは平成5年11月1日現在の休学を除く昼間コース在籍学生数1,953名の約29%に相当する²⁾。回答者の学年と学科別の内訳は第2表に示されている。参考までに在籍学生の学年・学科別の内訳も示しておいた(第3表)。回答者の学年・学科別の構成が在籍者のそれから出来るだけ離れないように注意を払ったが、それでも学年毎の学科別比率では実際のそれから大きく離れている場合が出てきた³⁾。

[注]

1) 調査は基礎教育科目と専門科目の講義時間中と4年生のゼミナール担当教官に依頼して実施した。調査票は付録2に示した。調査票配付科目名と回答数を次に示す(()は配当年次)

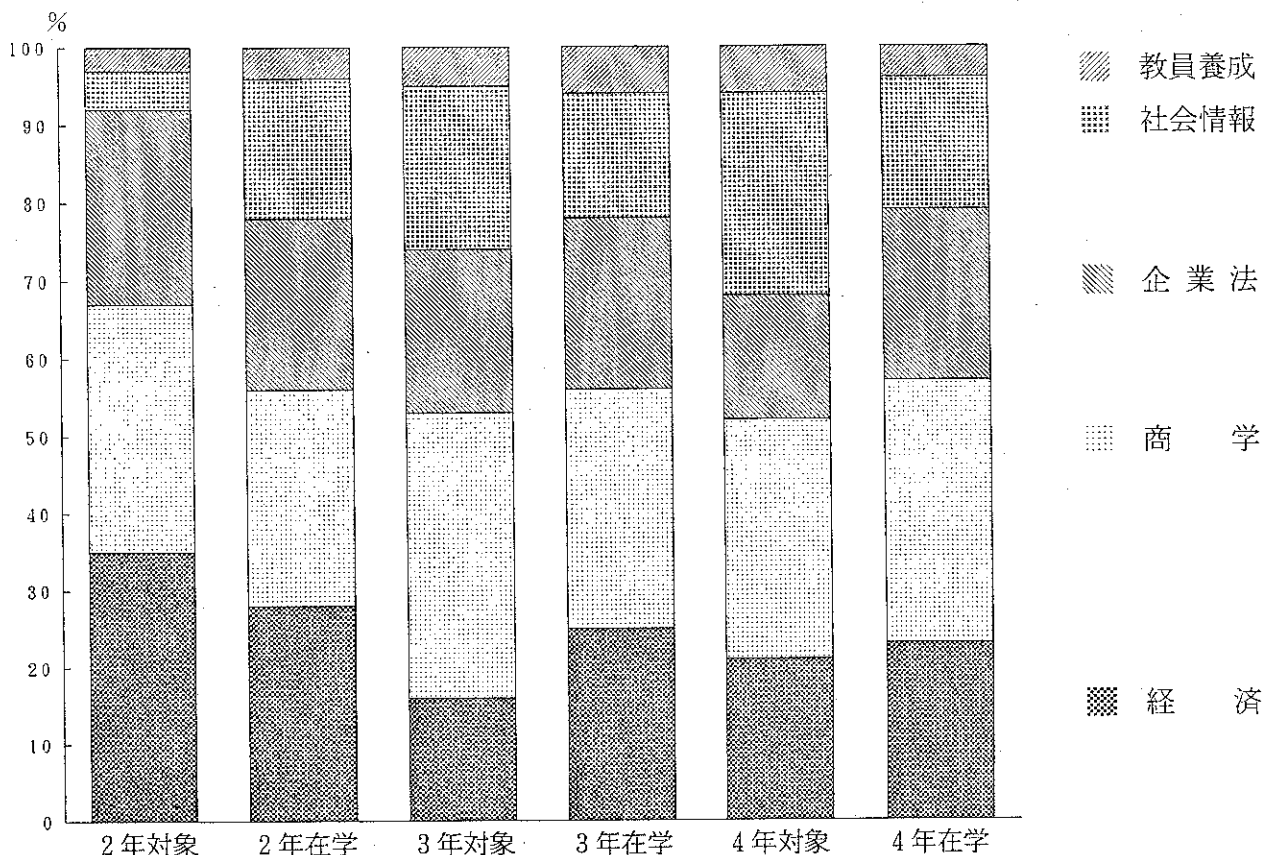
: 経済学概論(I) 150, 国際経済論(II) 128, 貿易政策(III) 44, 流通政策(III) 67, 行政法(III) 44, 管理科学II(III) 44, 経済学史(III) 4, ゼミナール(IV) 98.

ご協力を頂いた先生や職員の方、アンケートに応じてくれた学生諸君に感謝します。

2) 講義時間を利用したため、恒常的に欠席している学生の意見は反映されていない。また回答者の中には夜間生の学生も数名混ざっているが、今回は特に区別しなかった。

3) 第2表と第3表を比べると、学年別では2年生の回答者の比率が在籍者のそれよりも低く(20%と26%) 3年生が高い(31%と24%)。全体学生の学科別割合ではそれほど大きな違いはない。しかし各学年における学科別の比率では、大きく異なる場合がある。例えば、2年生の在籍学生の中で社会情報学科に所属している学生は18%であるが、アンケート調査の回答者の比率はわずか5%に過ぎない。社会情報学科はその分3、4年生の回答者の比率が在籍者の比率よりも高い。経済学科は2年生の比率が実際よりも高く、商学科と企業法学科は3年生が高い。商業教員養成課程の回答者は2年生が相対的に少なく4年生が多い。このような母集団とサンプルの間の違いは当然調査結果に影響を与えると思われるが、今回の調査ではそこまで考慮しなかった。

図1 学年別学科別学生構成



注) 「対象」は、アンケート対象学生、「在学」は、在学学生を示す。「4年」は、過年度生を含む。

アンケートの集計結果は第4表から第8表に示されている。以下で主要な結果を、学生全体 (a) と学年別 (b)、学科別 (c) 及びその他 (d) に分けて、箇条書きにして述べる。授業評価に関する学生の意見は、アンケート結果の後に独立に取り上げる。なお以下の文章の中に出て来る比率は各表のそれを一桁前の位で四捨五入した数字である。

2. 学 生 の 生 活 (第4表)

(1) 住 居

- 全体の学生のはほぼ半分 (49%) が札幌の自宅から通学している。小樽に自宅のある学生と合わせると商大の約 57% が自宅生である。
- 高学年になると札幌のアパートを借りる学生が増える傾向があるといわれるが、4年生と過

年度生の比率は2、3年に比べると確かに多少高い（全体は8%であるが、4年生は10%）。もっとも1年生の中にも札幌で一人暮らしをしている学生が比較的多いので、最近は傾向が変わってきているのかもしれない。

c. 学科別にみると経済学科と商業教員養成学科の学生は、小樽／自宅の比率が高く、企業法学科と社会情報学科の学生は札幌／自宅の比率が高い。

(2) 課 外 活 動

a. 全体では体育会 31%、文化系サークル 28%、無所属 28% となり、体育系の同好会が 14% である。

b. 学年別では他学年と比べると過年度生に体育会の学生が多い。2年生は他学年に比べると、課外活動非加入率が高く、1年生はそれに対して加入率が高い。もう一つの特色は、学年が低いほど体育系の同好会の比率が高くなっていることである。

c. 学科別では経済学科の学生は体育会（37%、全体は 31%）に、企業法学科は文化系サークル（38%、全体は 25%）に所属している比率が高い。

(3) ア ル バ イ ト

a. 全体の学生の約 65% が定期的にアルバイトをしているが、週1～3回が最も多く（45%）、次に週4回以上（21%）である。

b. 週1～3回以上のアルバイトでは、他の学年に比べると3年がやや多い（72%、全体は65%）。

c. 学科別では企業法学科が他学科の学生に比べるとアルバイトをしていない（53%）。

(4) 自 宅 で の 学 習

この質問は学生が自主的にどれほど、またどのような勉強を行っているかを尋ねるものである。回答の選択肢は「授業の準備、試験勉強だけ」「それに加えて評論的な雑誌類」「専門書もよく読む」「資格試験や英会話の勉強」とした。

a. 全体の学生の 64% は、「授業に必要な予習やゼミの準備と試験勉強以外には勉強をしていない」と答えている。これは特に1年生に多い（75%）。次に「資格試験や英会話」の比率が高い（24%）。特に、2、3年生に多い。

b. 予習や試験勉強以上の自主的な勉強をする比率は高学年になるほど増加している。例えば回答「予習や試験勉強以外に、講義・ゼミに関連した専門書、雑誌をよく読む」の比率は、1年生は 1% にも達しないが、3年生は 5%、4年生、過年度生は約 10% である。しかし、4年生はこの時期は卒業論文の作成に最も力を入れなければならない時である。10% という数字は何を意味するのだろうか。

- c. 学科別の特徴として、経済学科が「予習と試験勉強だけ」の比率が相対的に高く（70%、2年以上の平均は60%）、その分「評論的な雑誌」が大きく（13%、平均は9%）、「資格試験や英会話」が低い（10%、平均は25%）。相対的に「専門書をよく読む」学科は、企業法学科である（8%、平均は5.6%）。

(5) 大学以外の学校

最近の学生は、大学以外に大学の学問と関係があるが、大学では十分に与えられない実務の知識を得るために、英会話や会計などの学校に通っているといわれるが、それがどの程度なのかを調べるために、この設問を設けた。しかし、質問で「資格取得のため」と限定したこと、また当該学校の性格を明確にしなかったことなど、質問が不十分であったために、以下のコメントは参考程度と考えて頂きたい。

- a. 無回答が約60%あり、これを実務的な学校に通ったことがないとすると、40%の学生はなんらかの学校に通ったことがあることになる。しかし、「その他」の中に自動車学校などあまり大学の学問と関係のない学校が含まれているために、この数字はわれわれの意図したものとはいえない。
- b. 「その他」を除くと、「英会話」が42名、「英語以外の語学」が3名、「会計・簿記」が8名、情報関係が9名で、以外に少ないと思われる。ただし、3、4年の比率が高い。
- c. 学科では、経済の学生の英会話学校の比率が相対的に少なく、社会情報の学生の情報関係と企業法の英会話の比率の高さが多少目立っている。

3. 入学に関して (第5表)

ここでは入学試験の際の科目の選択、本学の志望順位、志望の理由を尋ねた。入試の際の資料からすでに明らかにされていることと重なっているかもしれないが、ある程度基礎的な資料が得られた。また今回は行わなかったが、これらのデータを使うと、推薦入学制度で入学した学生と一般入試による学生との違いや第1志望ではないいわゆる不本意入学生の問題などを分析することは可能である。

(1) 入学試験選択

- a. 全体で数英選択類が61%、国英選択類が19%、推薦入学者が19%である。
- b. 学年別の表から、ここ2年間は国英選択の学生の比率が高いことが分かる。
- c. 学科別では、比較的明瞭な違いを見いだすことが出来る。社会情報学科と経済学科の学生は、数英選択類で受験している割合が高く（それぞれ85%と72%、2年以上の平均は64%）、商業

教員養成課程と企業法の学生は国英選択類の比率が高く（42% と 28% , 平均は 18%）、商学科の学生の中に推薦制度で入学した学生が多い（25%、平均は18%）。

(2) 志 望 順 位

- a. 全回答者の 38% が、第一志望で本学に入学している。本学が第二志望である学生の割合は、56% である。その約 4 割の学生は第一志望が経済系学部志望と経済以外の文系学部志望である（全体に対する割合はともに、23%）。残りの 2 割は第一志望が理系で、全体の約 1 割を占めている。
- b. 学年別では、学年が低いほど本学第 1 志望が増えている（1年生 42%、2年生 39%、3年生 37%、4年生 30%）。これは推薦入学制度と関係があるのだろうか。ところが過年度生にも第一志望者が多いことが注目される（52%）。本学第 2 志望者では、2年生には第 1 志望が経済以外の文系であった学生の比率が高い（31%、全体は25%）。これに対して、4年生は第 1 志望が理系の学生の比率が高い（17%、全体は10%）。近年理科系の学生の入学が減少しつつあると言われているが、この数字はこのことを裏付けているだろうか。
- c. 第 1 志望者の割合がもっとも高い学科は、商業教員養成課程と商学科である（それぞれ 52% と 42%、平均は36%）。商学科の場合には推薦入学者が多いこと（回答者の中の推薦入学者 75 名中、36名 が商学科に所属）も影響していると思われる。経済学科は、他学科と比べると本学第 2 志望者で第 1 志望で経済系と理系を受験した学生が多い。企業法学科の学生の 4 割は、第 2 志望者で第 1 志望が経済以外の文系である。理系志望の学生は非常に少ない。これときわめて対照的なのは社会情報学科で、学生の 32% は理系志望者で、人数 25 名は理系志望者全体の約 6 割を占める。商業教員養成課程の学生の特色は、本学第 1 志望者が半分以上を占めることだが、第 2 志望者の中では、第 1 志望が経済系の比率が極端に低い（10%、平均は 24%）。

(3) 入 学 の 動 機

- a. 5つの選択肢の中で回答が多いものから挙げると「地元の国立大学で経済的だから」（37%）、「自分の学力で入れそうだったから」（27%）、「商学部の勉強をしたかったから」（13%）、「就職が良いという評判があったから」（10%）、「その他」（8%）、「小樽／北海道の風土に引かれたから」（5%）となっている。
- b. 学年別ではそれほど顕著な特色を見つけることは出来ない。あえて挙げれば、1、2年生に「商学部の勉強をしたい」が多いこと、「地元の国立大学」は4年生と過年度生に多いこと、それに対して3年生は、「自分の学力」が比較的多い。
- c. 学科間では比較的明瞭な差が認められる。経済学科の学生は「地元」と「就職」にやや優先度を置いており、商学科の学生は「商学部の勉強」が抜きんでて高い。企業法学科は「就職」

が比較的高く、社会情報の学生は「学力」を選んでいる。商業教員養成課程の学生は「その他」が断然多く、「北海道の風土」も多い。

- d. 「その他」が 8% もあるが、具体的に記された動機の中では「外国語（主に英語）の教育に力を入れているように見受けられたから」というのが圧倒的である。おそらく商業教員養成課程の学生の「その他」はこの語学であるだろう。コンピュータ、経済学、法律を、あるいは文系で数学を勉強したいということも記されているが、少ない。

4. 学 科 に 関 し て (第 6 表)

学科所属の時期や選抜方法はこれまで議論されてきたが、ここでは学生が何を基準に学科を選んでいるのか、志望はかなえられているのか、そして自分の学科に満足しているのか、どのような点に不満があるのか等を尋ねてみた。1年生はまだ学科に所属していないため、2年生以降の学生が対象である。

(1) 第一志望選択の動機

- a. およそ 74% の学生が、「当該学科の勉強」と「ゼミナール」を第一志望の理由にあげている。残りの約 16% の学生は、ほぼ均等に単位取得の容易さと就職を選んでいる。
- b. 学年ではそれほど大きな違いはないが、3, 4年生に単位の容易さを理由とする率が2年に比べると高いといえるかもしれない。
- c. 入学志望の場合と同じように、ここでも学科間では選択理由に比較的明瞭な違いが認められる。他の4学科と大きな違いを見せているのが商業教員養成課程で、就職とゼミの比率がきわめて高い（それぞれ 38%、14% で、平均は 11%、6%）。学科の勉強が比較的高いのは企業法学科だが（76%、平均は 68%）、就職も他の3学科に比べると高い（18%）。社会情報では単位の容易さをあげる学生が際だって多い（23%、平均は11%）。これは平成3年度入学の学生（3年生）まで社会情報学科の専門科目の単位が6単位であり、学生がそれに魅力を感じていたことを裏付けている。また社会情報ほどではないが、商学科の学生も幾分自分の学科の単位が取得しやすいと思っているようだ（14%）。

(2) 所属学科の志望順位

- a. 学科に所属している2年生以上の学生の86%は自分の学科は第一志望であると答えている。これは実際の所属決定での数字よりもやや高いと思われる。
- b. 学年でいえば、第1志望で学科に所属できた比率は2年生がやや低いが3, 4年生はきわめて高い。ところがこれとは対照的に、過年度生は第1志望者が極端に少ない（43%）。

c. 学科では経済学科が第1志望者の比率がきわめて小さい(55%)ことが注目される。

(3) 自学科の満足度

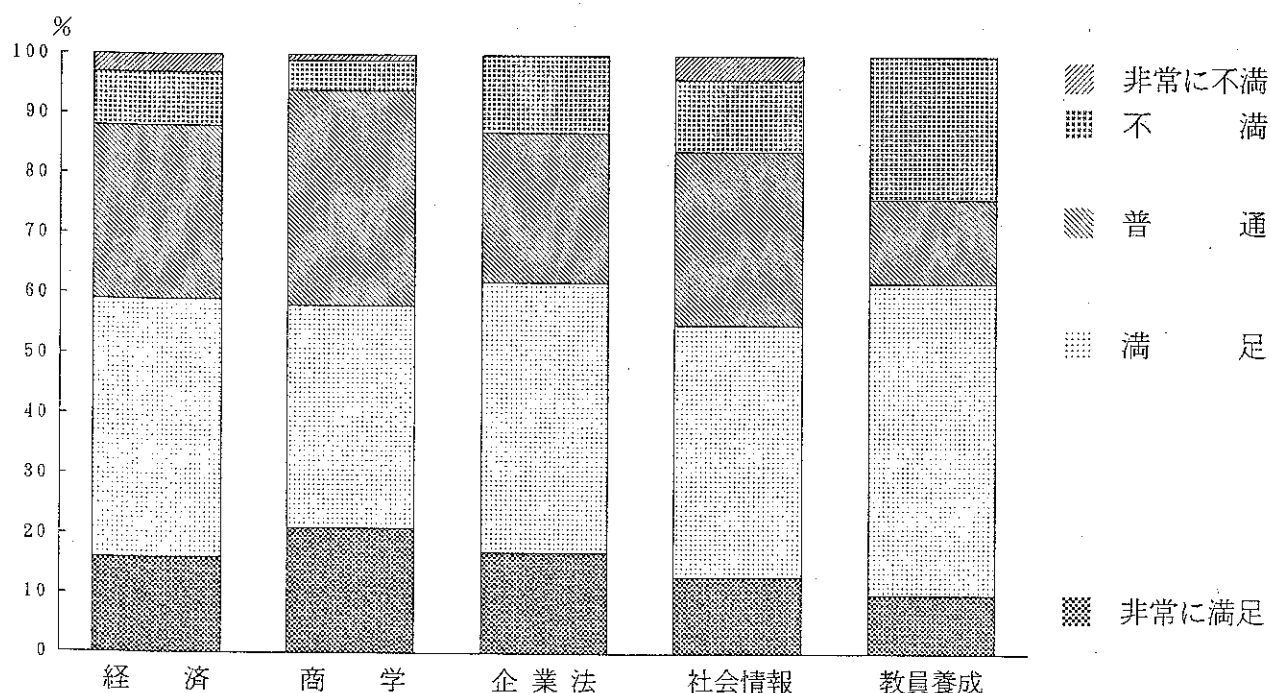
a. 全体で自分の学科にほぼ満足(非常に満足と満足の合計)と回答した学生の比率は、59%で、約6割の学生が自分の学科に満足していると考えてよい。他方、不満を感じている学生は約11%である。

b. 学年では高学年に成るほど満足度は高くなるが、2年生は平均よりも10%も低く(48%)、不満もやや多い。過年度生は、第一志望比率の低さにも関わらず、自学科に満足しているように見えるが(57%)、他方で「非常に不満」な学生も多い(14%)。

c. 学科では社会情報学科の学生が、他と比べて満足が低く(55%)、不満が高い(15%)。これに対して、商業教員養成課程は、満足している学生も多いが(62%)、不満を持っている学生も多い(23%)。学科の中で満足が最も高い学科は企業法学科である(62%)。ただ、経済学科の学生の評価は平均的であり、これは第一志望が極端に少ないことを考慮すると、むしろ最も評価されていると考えてよいかもしれない。

d. 具体的にどのような点で自学科に満足/不満かを尋ねたが、多くの意見は学科の授業の内容に関する意見で、それらは各学科の科目評価の所で考慮し、ここでは学科選択の方法についての学生の意見を紹介する。あまり多くはないが、やはり第1志望で希望する学科に所属出来なかった学生は、「興味のある学科に入れるようにすべき」と書いている。所属決定の際の基準についての批判もある(基準があらかじめ知らされていない/希望しない学科の成績まで学科決定の対象とするのはおかしい)。概論やガイダンスだけでは学科を選択するのは不十分だという意見や入試の際に学科単位で募集すべきだという意見もいくらか見られる。

図2 学科別満足度



5. 出席状況 (第7表)

出席率の問題はどの大学でも昔から問題とされてきたことである。ここでは、初めに登録履修科目数がどれくらいか、その中で実際に8割以上出席している科目数は何科目くらいか、を尋ねた。次に、出席(欠席)の仕方(パターン)を聞いてみた。どの科目も同じような割合で出席(欠席)するのか、それとも科目によって出席するものと欠席するものが分かれるのか、もしそうであれば、それは何故か。いくつかの理由をあげて尋ねてみた。

この項目では一つ注意しなければならない点がある。それは授業中にアンケートを行ったため、欠席がちな学生は、アンケートに応じていない可能性が高いことである。したがって質問(2)の実際の出席科目数は大学全体の学生の平均よりも多くなる傾向にあると思われる。この点は、今後この種のアンケート調査を実施する際には考慮を要する。

(1) 履修科目数

- a. 回答した学生の45%は15～19科目を履修している。次に多いのが10～14科目で約22%の学生。20科目以上登録している学生も17%いる。学生一人当たりの平均を求めると14.6科目になる。
- b. 学年で見ると、1～3年生と4年生の間で大きな差がある。1～3年生の半分以上は15科目以上を履修しているのに対して、4年生の半数以上(54%)は4科目以下しか履修していない。各学年の平均登録科目数を算出してみると、1年生=18.4、2年生=16.5、3年生=15.2、4年生=7である。
- c. 学科別では平均科目数では社会情報が他より少ない(10科目、平均は13科目)こと、経済学科がやや多いこと(15科目)、そして商業教員養成課程の学生の43%が20科目以上を履修していることが目につく点である。

(2) 実際の出席科目数(出席率)

ここでは学生が実際に80%以上出席している科目数を尋ね、それと登録科目数と比べてみる。そしてある科目数以上の出席人数を登録人数で割った値を出席率と定義する。

- a. 学生一人当たりの平均出席科目数は10科目である。したがって、これを学生一人当たりの平均登録科目数で割ると平均的な出席率がでる。これは68%である。20科目以上出席している学生数は31人で、20科目以上登録している学生は96人いるから、20科目以上登録学生の出席率は32%。これを15科目以上まで広げると、出席率は43%に上昇する。
- b. 高学年になればなるほど出席率は低くなっている。15科目以上の登録数で見ると、1、2年生は登録数の約半分の科目に80%以上出席しているが、3、4年生は約3割しか出席していない。10科目以上で見ると4年生の出席率は1/4を下回る。

- c. 学科別の出席率も明瞭な違いが見られる。商業教員養成課程と企業法学科の学生の出席率が抜きん出て高い。特に前者は10科目以上登録した学生16名のうち13名が80%以上授業に出席している。他の3学科にはほとんど違いは見られないが、15科目以上の登録数では、経済学科の学生の出席率が悪い(22%)。

(3) 出欠のパターン

出席に関してもう少し分析するために、質問16のように出席/欠席の仕方を尋ねてみた。

- a. 半分以上の学生(55%)は、80%以上出席する授業とほとんど(20%以下しか)出席しない授業とに分かれると答えている。1/3は「だいたい出席」していると回答している。
- b. 前項の出席率の調査からも明らかにされているが、低学年ほど平均的に出席している。これは出席を重視する語学の授業が低学年に多いことも理由の一つであろう。4年生と過年度生に「ほとんど出席しない」比率(それぞれ11%と14%)が他の学年に比べて際だって高いことも指摘しておくべきことであろう。
- c. 学科別では、出席率の場合とほぼ同じ結果が出ている。経済学科の学生に「ほとんど出席しない」学生が多いのが目立つ。

(4) 出欠の基準

出席と欠席が明確に分かれる学生は、どのような基準で出席(欠席)をしているのだろうか。そこで質問17で、「おもしろい授業には出席」「自分の興味のある科目は出席」「出席をとるものは出席」「課外活動を優先する」「卒業単位に関係ある科目には出席」を回答の選択肢としてあげてみた。

- a. 全体を通してみると、無回答を除けば「自分の興味」(22%)を基準にあげる学生が最も多い。次に「出欠の有無」(19%)「おもしろい授業」(13%)が続く。
- b. 1年生は「出欠の有無」が多く(29%)、4年、過年度生は「卒業単位と関連のある科目」の比率が高い(9%と14%)。「授業のおもしろさ」の比率は高学年になるほど高くなる。
- c. 学科別で特徴が出ているのは、企業法学科が「授業のおもしろさ」を重視し「出欠の有無」を軽視している点、それと対照的に社会情報学科が「出欠の有無」を重視し、「授業のおもしろさ」は期待していないことである。経済学科の学生は「卒業単位」が気になるようだし、商学科は「課外活動」を優先している。
- d. 無回答(37%)の中味は分からないが、「その他」として学生が記入している理由の中で、比較的多いのは、出席しないと理解できない講義には出席するが、出席しなくても理解できる(試験にパスする)科目は欠席するという理由である。

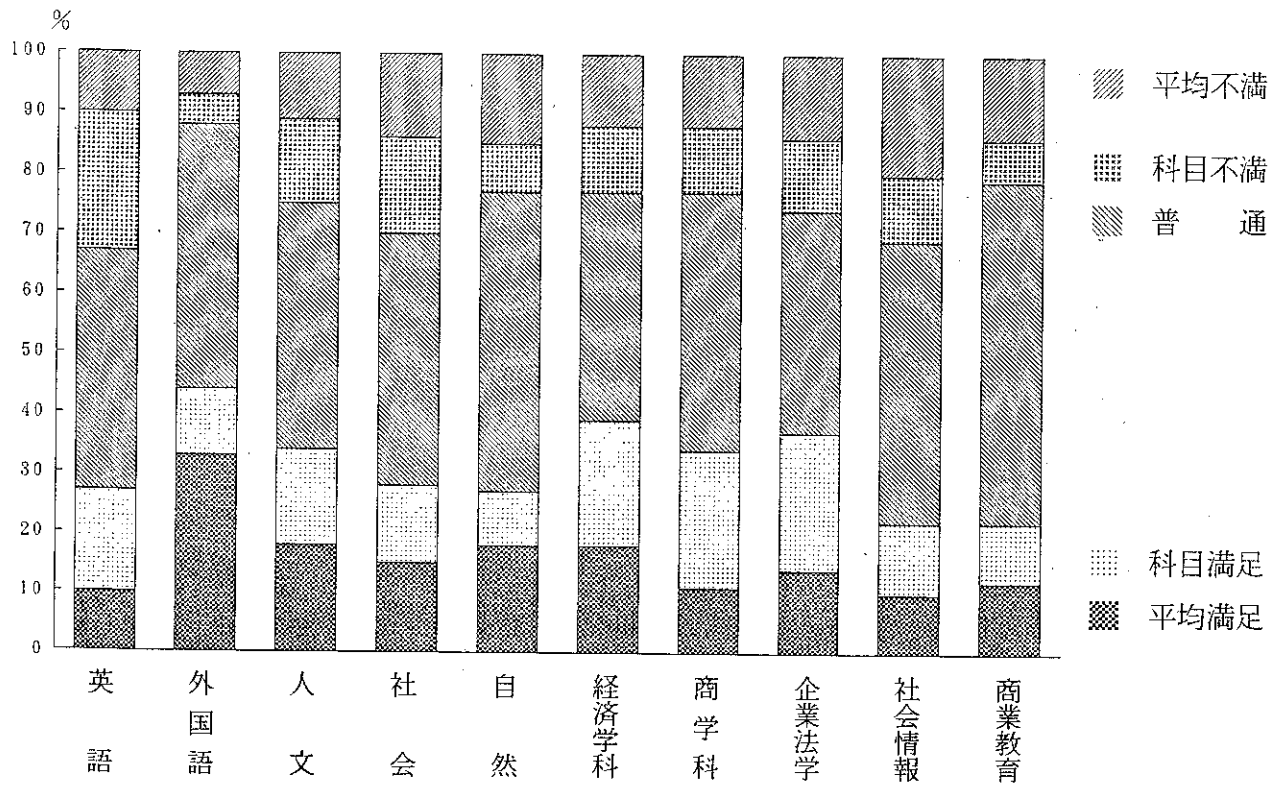
6. 授 業 の 評 価 (第 8 表)

このような形で授業の評価を学生に求める試みはおそらく本学では初めてではないだろうか。個々の授業では今までにも米国で行われているような質問表を使って実施した人もいるだろうし、あるいは感想を尋ねるという形で学生の反応を確かめる試みはなされてきたであろう。ここでは、科目群ごとではあるが、全講義科目について、学生の反応を「満足」か「不満」かという主観的な概念で尋ねてみた。本来はもっと具体的な項目を設けて質問するのが、効果的であろうが、「授業の内容を説明の仕方、題材、程度、おもしろさ等を基準にして総合的な評価を求める」という説明を添えて、質問してみた。回答の選択肢は、保健体育、基礎教育及び演習(ゼミナール)を除いた科目については、「1. どの科目(クラス)も平均的に満足」「2. どれも普通」「3. どれも平均して不満」「4. クラス/科目によって異なるが、満足できる授業が多い」「5. クラス/科目によって異なるが不満な授業の方が多い」の五つである。各科目に対する学年別、学科別の回答の集計結果は第6表に示されるが、次の表は全体の科目群毎の評価である。5項目の回答以外に、回答1と4を合計した数字を「満足」、回答3と5を合計した数字を「不満」とした数字を加え、さらに保健体育・基礎教育科目の回答(「科目による」「担当者による」)をまとめ加えた。それらの科目はゼミナールと同様に回答が異なっているために、回答の読み替えを行っているが、詳細は表下の注を参照されたい。

表の数字は、各科目に対する学生全体の各回答を選んだ比率である。例えば、英語の回答1の10.0%は、英語の授業に対して「どのクラスも平均的に満足」という回答を選んだ学生の比率が回答者全体の10.0%であることを示している。これによって、「満足」か「不満」かという形での授業に対する学生の評価を知ることが出来る。ただし、専門科目は2年生以上の学生、ゼミナールは3年生以上の学生の集計結果である。

「満足」(1+4)の比率の高い科目は、高い順に並べると、「英語以外の外国語」「経済学」「企業法」「一般教育・人文科学系」である。反対に「不満」(3+5)の比率が高いのは、「英語」「社会情報」「一般教育・社会科学系」などである。また「満足」から「不満」を差し引いた数字で、「満足度」(プラスの場合)と「不満度」(マイナスの場合)というものを表現すると、ゼミナールを除けば、「英語以外の外国語」(+31.1)「経済」(+15.5)「企業法」(+12.8)「商」(+12.1)「一般教育・人文系」(+9.1)が「満足度」が高く、「社会情報」(-9.3)「英語」(-6.9)は「不満度」が高い。「一般教育・社会科学系」(-1.8)、「一般教育・自然科学系」(+3)、「商業教員養成」(+0.9)は差があまりない。

図3 科目群別授業評価



第1表 科目群別授業評価

	1. 平均/満足	2. 普通	3. 平均/不満	4. 科目/満足	5. 科目/不満	満足(1+4)	不満(3+5)	科目/担当
英語	10.0	39.6	10.9	16.8	22.8	26.8	33.7	
外国語 ^a	33.2	43.7	7.9	10.5	4.7	43.7	12.6	
保健体育 ^b	19.0	51.2	10.5					19.3
基礎教育 ^c	11.8	27.1	10.9					50.3
一般(人文)	18.3	40.7	11.2	16.0	13.9	34.2	25.1	
一般(社会)	15.2	41.0	14.1	13.4	16.3	28.6	30.4	
一般(自然)	17.6	49.7	15.7	9.0	7.9	26.6	23.6	
経済学科	17.7	37.7	12.8	21.2	10.6	38.9	23.4	
商学科	11.4	42.9	11.9	23.2	10.6	34.6	22.5	
企業法学科	14.4	37.1	13.6	23.4	11.4	37.8	25.0	
社会情報学科	10.3	47.5	20.0	11.5	10.9	21.8	30.9	
商業教員養成	12.6	57.3	14.6	9.7	6.8	22.3	21.4	
ゼミナール ^d	27.0	29.6	10.6	33.9				

a : 英語以外の外国語科目

b : 保健体育科目の回答選択肢は、(1)理論・実技とも(2)普通(3)両方とも不満(4)クラスや運動の種類によって異なる、である。

これらはそれぞれ表の、(1)→(1)平均/満足、(2)→(2)普通、(3)→(3)平均/不満、(4)→科目/担当、に読み替えている。

c : 基礎教育科目の回答選択肢は、(3)科目による(4)先生によるの合計を、科目/担当欄に記入。

d : ゼミナールの回答選択肢は、(1)期待以上に評価できる(2)満足だが、改善すべき点がある(3)普通(4)期待はずれの4項目。読み替えは、(1)→(1)、(2)→(4)、(3)→(2)、(4)→(3)とする。

科目群ごとに評価が異なる原因には、いろいろなことが考えられるが、以下では学年別と学科別の評価を見ることにする。

(1) 英 語

- a. 英語に対する学生の評価の特色は、まず第一に不満と答えた学生の方が満足と答えた学生よりも多いことである。学生は平均的に不満というよりもクラスによって不満を抱いている。「クラスによって異なるが不満な授業の方が多い」という回答が24%もあり、これは他科目に比べてもきわめて高い。
- b. 学年で見ると、4年生を除いて「不満」が「満足」を上回っている。特に過年度の学生の不満度が非常に高い(-29%)。次が1年生、3年生という順序である。
- c. 学科になると1年生の影響が排除されるために、全体の不満度は多少下落する。学科別では、経済、商学科の不満度が高いのに対して、商業教員養成課程と社会情報学科は満足度が高い。

(2) 英語以外の外国語

- a. 英語とは対照的に学生の満足度は高い。満足と答えた学生数は不満と答えた学生の約3.5倍である。40%以上の学生が満足と答えている。
- b. 特に1、2年生の満足度が高い。
- c. 学科では経済、商学科は満足度が比較的低く、企業法、社会情報、教員養成課程は平均を上回っている。

(3) 保健体育科目

- a. 回答選択肢の内容が異なっているので、単純に他と比較することは出来ないが、この科目の特色は、「普通」と答えた学生が50%を越えることである。「理論・実技ともに満足」の比率は19%、「両方とも不満」が11%で満足が不満を上回っている。ただ「クラスや運動の種類による」にマークした学生が19%いる。具体的にどのような点で、不満があるかは後述する。
- b. 学年では、高学年ほど満足の度合いが弱くなり、不満が強まっている。
- c. 学科では、それほど大きな違いは見られない。

(4) 基礎教育科目

各専門科目の概論と数学を含むこの科目群は、他の科目群とは性格が異なるので、回答の選択肢も異なっている。

- a. わずかであるが「どの科目も満足」という回答が「どの科目も不満」という回答を上回っている。しかしいずれも1割をすこし越えるくらいである。最も多い回答は「科目によって異

なる」で、26%、次に「先生によって異なる」が 24% で、両方で 50% に達する。つまりこの科目群は学生の評価のバラツキが大変大きいといえる。

- b. 学年では 1、2 年生が全般的に不満を持っている。両学年とも「平均的に満足」よりも「平均的に不満」の方が多いが、1 年生の方が顕著である（不満度は 1 年生が -10%、2 年生が 2%）。さらに両学年とも「科目・先生による」という回答が 60% を占めている。ただし、1 年生を除くと「満足」の方が多くなる。
- c. 学科別では評価にそれほど大きな差は認められない。企業法学科と商業教員養成課程に「不満」が多くなっている。

一般教育科目

(5) 人文科学系

- a. 全体的な評価は、一般教育科目の中ではもっとも高い。
- b. 学年では 4 年生の満足度が高いが、過年度生は「不満」の方が「満足」を上回っている。
- c. 学科では、商業教員養成課程、社会情報学科、商学科の順序で満足度が高い。経済学科は満足度を不満がわずかであるが、上回っている。

(6) 社会科学系

- a. 全体ではわずかだが「満足」と答えた学生より「不満」と答えた学生の方が多い（前者は 29%、後者は 30%）。
- b. 1 年生が特に不満を抱いている。対照的に 2 年生は満足度が大きい。過年度生も不満が強いが、結局 1 年生と過年度生のマイナスの評価が全体に影響を与えている。
- c. 社会情報学科が満足度がわずかにマイナスで、企業法学科の満足度が他よりも高い点を除けば、学科間では大きな違いはない。

(7) 自然科学系

- a. 全体では「満足」（27%）が「不満」（24%）を上回っているが、「満足」の比率は他の一般教育科目に比べると小さい。他の一般教育科目と異なるもう一つの点は、「科目によって満足」と「科目によって不満」を加えた、バラツキが小さいことである。その比率は、約 17% で、他の一般教育科目の 30% に比べると小さい。
- b. 学年では 1、4 年生の満足度が高い。
- c. 学科では商業教員養成課程の満足度が非常に高く、社会情報が比較的高い。他方商学科は満足度がわずかであるがマイナスになっている。

専 門 科 目

(8) 経済学科科目

- a. 全体の 39% の学生が「満足」と答えており、これは「不満」の 23% を約 16% だけ上回っている。満足度は 4 学科の中では一番大きい。経済学科の場合、「平均的に満足」と回答した割合が他学科に比べて高い (18%) のが特色である。バラツキは 32% で専門科目の中では平均的である。
- b. 学年では 2 年生と過年度生の満足度が高く、3 年生は低い。
- c. どの学科もそうであるが、学生は自学科の科目に対する満足度が高い。経済学科では約 59% の経済学科の学生が自学科の科目を「満足」と答えている。他学科では社会情報の学生の満足度が高く、商業教員養成課程はマイナスである。

(9) 商学科科目

- a. 全体の学生の 35% の学生が「満足」を、23% の学生が「不満」を感じている。科目間のバラツキはどうだろうか。「科目によって満足」と「科目によって不満」を合計すると、34% になり、経済科目よりもやや多い。
- b. 学年では 4 年生の満足度が最も高く、過年度生は満足度はマイナス、2 年生も満足と不満がほぼ同数である。
- c. 学科では商学科の学生の 57% は「満足」と回答している。ただ経済学科と企業法学科の学生は「満足」よりも「不満」の方に多く回答し、学科間のバラツキは経済学科の科目よりも大きい。

(10) 企業法学科科目

- a. 「満足」は学生全体の 38%、「不満」は 25% である。科目間のバラツキは 35% であり、専門科目の間では最も大きい。
- b. 学年では 2、3 年生に満足度が高く、4、過年度生は満足、不満が同数である。
- c. 学科別では、ここでも自学科の企業法の学生の満足度が高く、「満足」と回答した学生の比率は 67% で、専門科目の中では最も高い。教員養成課程の満足度も高いが、経済学科の学生は満足度がマイナスである。また商学科、社会情報の満足度もプラスであるが低く、学科間のバラツキは大きい。

(11) 社会情報学科科目

- a. 他の専門科目と異なって、社会情報学科の科目だけが、「不満」が「満足」を上回っている。「不満」は 31%、「満足」は 22% である。科目間のバラツキは他の 3 学科の科目に比べる

と少ない (22%)。これは「平均的に不満」の比率が他学科に比べると高い (18%、他の 3 学科の平均は 12%) ことから窺える。

- b. 学年ではどの学年も満足度はマイナスであるが、特に 2 年生の不満足度が高い (-20%)。低いのは 4 年生である (-5%)。
- c. 社会情報学科の学生はプラスの評価をしているが、他の学科はマイナスの評価である。自分の学科の科目を「満足」と答えた学生の比率は、47% であるが、他の 3 学科が 60% 前後であることを考えれば、これは低い。

(12) 商業教員養成課程科目

商業教員養成課程の専門教育科目は、他の学科の専門科目をすべて含む。しかし、ここで意図しているのは「教職科目」に対する評価である。「教職科目」は、「教職に関する科目」と「教科に関する科目」とに分かれ、前者は教育学関係の科目、後者は英語関係の科目である。「教職科目」の評価という点を明確にしなかったために、結果の信頼性に疑問が残るが、325 名が回答せず回答数は 103 に過ぎないこと、そして学生の意見を読んでも、学生はこの「商業教員養成課程科目」を「教職科目」と取っていると判断し、結果を示すことにした。

- a. 「満足」と「不満」の数はほぼ同じ (前者が 23、後者が 22)。「普通」の比率が他の専門科目に比べると高いのが特徴である。科目間のバラツキは少ない (16%)。「平均的に満足」か「平均的に不満」かのどちらかである。
- b. 学年ではバラツキが見られ、2、4 年生は「満足」が多く、3 年生と過年度生は「不満」が多い。
- c. 教員養成課程の学生は他の専門科目と違って、自学科の科目 (教職科目) を必ずしも評価していないようである。「満足」と回答した学生は 7 人であるが、「不満」が 6 人もいる。むしろ商学科の学生の評価の方が高い。

(13) 演習 (ゼミナール)

これも回答無しが比較的多く、有効な回答数は 275 名で 3 年生以上の学生の 88% である。

- a. 全体では「期待した以上に評価できる」が 27% で、「満足しているが改善すべき点がある」が 34%。合計すると約 61% になる。「期待したほどではない」は 11% という結果がでている。
- b. 学年では 4 年生の方が 3 年生よりも「期待以上の評価」が高く、7 割近くの学生がゼミに満足している。
- c. 学科で「期待以上の評価」は商業教員養成課程が最も高く (38%)、次いで経済 (33%)、企業法 (30%)、社会情報 (27%)、商学 (21%) と続く。「期待はずれ」は低い順に並べると、企

業法 (7%)、社会情報 (9%)、商学 (12%)、経済 (13%)、教員養成 (15%) と続く。

7. 学 生 の 意 見

各科目群の評価に対する設問の後に、「具体的にどのような点が満足／不満なのか」として意見を述べる欄を設けた。2 / 3以上の学生がなんらかの意見を述べている。様々な意見がある。単に〈楽しい〉とか〈おもしろい／つまらない／難しい／わからない〉という感想を述べただけのものから、個別の科目に対して満足ないし不満の理由を詳しく説明したもの、あるいは〈声が低い／黒板の字が見えない／早口でノートがとれない〉など教授法に関するもの、採点や単位認定に対する不満から開講を希望する科目名の指摘など多岐に亘っている。個別の教官名を挙げて感情的と思われる批判を行っている学生もいるが、概して述べられた意見は真面目で時に鋭い指摘もある。

学年別の傾向としては、高学年になるほど意見は建設的・一般的である。また「満足」の理由を説明する意見よりも、なぜ「不満」なのかを説明した意見の方が数としては多い。以下では学生から寄せられた意見をまとめ、各科目群毎に示すが、要約する際に次の点に注意を払った。第一に、各科目群の意見の分量は、出来るだけ学生の意見の数に比例するようにした。第二に、前節の各科目群に対する数的な評価を反映させるような形で意見を取捨選択したが、既に指摘したように全体的に不満の意見が多いために、批判的なコメントの方が多くなっている。第三に、ここでは出来るだけ複数の学生による意見を取り上げたが、特に数が多いものについては、「多い」とか「非常に多い」という形容詞でそれを示している。他方で、一人の学生しか述べていない意見も場合によっては採用している。意見が少ない科目群ほど学生一人一人の意見が多く取り上げられる傾向にあるが、印象に残る意見であれば、たとえそれが一人の学生の意見であっても採用している場合は多い。この点で、意見の選択は客観を期したつもりであるが、主観的になっている部分があることは否めない。予めこのことを断っておきたい。

(1) 英 語

英語教育に対する意見は、もっとも多い。それも不満を表明したものが圧倒的である。学生の不満は、講読クラスの題材と教授法に集中している。典型的な意見は次にみられる。

〈高校と全くと言ってもいい程同じスタイルで、ただ教科書を訳してゆき、ほぼ全時間一方的に先生が授業を進行させてゆくことに疑問を感じてきた。誰を通し、誰を不可にするかを決めるだけの事務的なものでしかないように感じられた (3年生) / 単に翻訳して終わるだけはずまらない。高校とは違って別の面から勉強をしたかったが、高校の繰り返しだった〉 (4年生)

これは1年から4年までほぼ共通にみられる意見である。特に本学の語学教育を期待してきた学

生が多いだけに、幻滅感も大きいのであろう。〈商大のパンフレットに英語に力を入れていると書いてあるが、授業数が多いだけ(2年生)／ 大学案内に「商大は小樽外国語大学とも言われている」と書いてあったが、実際入学してみると単に共通英語があっただけで、形だけだと思った(4年生)〉

学生は明らかに実際的な英語教育を望んでいる〈国際化をめざすのなら使える英語を／英語の授業で感じることは、先生が単に自己満足の為に生徒を使っていること。生徒のニーズをくみとっているなら、なぜこんなプラクティカルじゃないことを続ける教官が多いのか(3年生)〉。

題材でいえば、経済やビジネス関係のもの〈商大だから Economist などを教科書に(4年生)〉を希望している。高校の教材の方が現代社会に対応しているという意見もある。もちろん多くのクラスがあるから、その中には〈実用的な・現代的な〉教科書を使っている人もいるであろう。したがって、問題は学生がそのようなクラスを選択できないか、開講されていても数が少ないことであろう。自由に選択出来ないことは学生の大きな不満の一つである。この不満は、さらにクラスによって内容や教科書の難易度、講義法、要求される予習時間、あるいは単位認定基準にかなり大きな差があるため、増幅されている。

英会話のクラスは、一定の評価はあるが、他方で、普通の教室で大人数で行われるので外国人教師との会話もなく上達しなかったという意見は多い。しかし、一般に外国人による授業は評判がいい。〈内容が工夫されている(4年生)／ 2年になっても必修の範囲で Native Speaker の授業を(2年生)／ 授業をすべて外国人に(4年生)〉

非常勤講師(日本人)については、〈手抜き〉や〈質問に行けない〉という批判がある一方で、〈個性的、おもしろい〉など高い評価を得ている講師も多い。

これ以外に学生の意見は、〈声が低い／文法は高校でイヤというほどやった／ペースが早すぎる／雑談が多すぎる／出席重視だと単位がとれるという授業は止めたほうがよい〉(4年生)／深く英語の教養が身についたという実感がなかった(4年生)〉という批判の一方で、〈高校とは違った内容で新鮮だった／ヒアリング重視の授業はただ英語を訳すよりも action があってよかった。身近な話題もあれば心理学を英語で学ぶなど、また英語の授業なのに国語的読みは楽しかった〉というよい印象を記した感想もある。また〈ただ読んで訳すだけではなく、もう少し人間的なやりとりがあった方が楽しい〉という希望、〈個人差があるので学年別・抽選は改善すべき、能力別クラスを〉(2年生)という提案もある。

まとめれば、学生たちは、英語は中学・高校と6年間、それもほとんど受身で学んで来たため、それまでとは異なったタイプの授業、そして「使える」英語の教育を期待しているようだ。それは例えば次の学生のコメントが述べているように、必ずしも「英会話」のクラスで学ぶということではなく、購読のクラスでもヒアリングや会話が出来るといえるような、そして外国の文化にも触れられるような多面的な授業を望んでいる。

〈教科書を読んで訳をつけていくというパターンで、説明はよかったのですが、毎回の授業が

少し単調すぎた。英語の力をつけるという意味では、会話クラスでなくとも、ヒアリング、会話などがあってもよかった〉（４年生）

(2) 英語以外の外国語

評価の数値に表れされているように、英語以外の語学に対しては、特定の問題について不満は集中していない。むしろ１年生などは、〈楽しい〉とか〈おもしろい〉という言葉で、満足を示している。これは〈初めて学ぶ外国語だから新鮮〉と自ら説明しているばかりでなく、〈教え方がいい／先生が親切、熱心／説明が分かりやすい〉という教え方も大きく作用しているように見える。これ以外に目につく評価としては、〈日常的で、題材も変化がある〉（１年生）や〈各国の文化を知ることが出来てよい〉（１年生）がある。また英語と同様に外国人講師の評価は高く native の講師は愉快だ。熱心。／中国の話や映画を見せてくれてテキストを読むだけのクラスよりは充実していた（２年生）。したがって外国人講師と日本人が２人で同一の外国語を担当している場合、クラスを完全に分けるのではなく、均等にして外国人の講師からも学べるようにしてほしいという希望が出されている。

ただ、高学年になるほど批判的な意見も多くなって、その中でも比較的多い意見が、〈クラスによって試験の難易度が違う（おもに３年生）／２年間では何も身につかない〉（全学年）／会話を中心に（全学年）／２年になって急に難しくなった（２年生）〉というものである。２年間だけでは足りないという感想から、〈必修をやめて選択制にすべき〉（２年生）という主張と〈３年以降もクラスを〉（２年生）という相対立する要望が出て来る。英語と同じように、ここでも実用性への要求は強い。〈実用とはならないから無駄（１年生）／中・高の英語の授業と同じ。日常会話など使えるドイツ語を学びたかった（４年生）／会話のクラスだったから満足〉

同じく英語に対するように〈ただ読んで訳すだけでは身につかない（２年生）〉や〈高校の英語と同じ、使えない（２年生）／文法ばかりでおもしろくない（１年生）／リーディングばかりだと疲れる。ヒアリングなども入れてほしい（２年生）／文法は理解できたが、歴史や文化など多方面から学びたかった（４年生）／先生を選択できるように（２年生）〉という感想もある。また授業方法に関して、〈週２回同じ先生で半年毎に分けるべきだ（４年生）／アラカルト方式をドイツ語以外にも〉という意見があった。

(3) 保健体育科目

大学で体育など必要ではないという意見は多いが、他方で〈運動不足を補うためには必要〉（２年生）や〈体育系クラブ以外は運動不足、もっと増やして（４年生）／実技は気分転換によい〉（３年生）など肯定的な意見も結構みられる。楽しいと答えた学生は、自分の好きな種類の運動が出来たため、選択出来なかった学生は不満がある。実技の種類や曜日を自由に選択出来

ないことと同時に、種類が少ないことも不満である。〈女子柔道がしたかった(1年生)〉など。実技の中では、スキーと水泳の評判は悪い。両方とも準備が大変なことがその原因であるようだ。もう一つ学生たちが、不満を表明していることの一つは、教え方が〈管理的・権威主義的〉な点で、〈学生の自主性をもっと重んじて欲しい〉(4年生)という意見に代表される。

全体を通して、学生は体育の実技を運動不足の解消や気分転換のために有益であると考え、もしく体力の維持・増進が目的なら、4年次まで開講すべき〉(2年生)で、現在のあり様は〈中途半端〉と思っている。それ以上の厳しい体育は望んでいないように見える。それは〈高校の方が楽しかった〉(3年生)や〈他の大学に比べると厳しい〉(3年生)というような感想に表れている。昔から問題になっている、英語や他の科目の履修への影響については、やはり不満を述べている学生はいる。

保健や体育理論については、〈内容による〉というのが、一般的な回答であろう。健康に関する身近な問題や話題性のある題材には、かなり興味を示している。しかし、全体としては、〈理論(の時間を)を減らして実技を多くして〉(4年生)、しかも自分の好きな種類を適度に行いたいと思っている。

(4) 基礎教育科目

これは4学科の基礎科目が並んでおり、必修であるし履修者も多い。担当者もほぼ毎年替わるだけでなく、1年間の講義も2人ないし3人で行われる場合もあるので、様々な意見が出されている。その多くは不満であるが、1、2年生の「不満」の比率が高いことを反映して、1、2年生からの批判的意見が多い。

〈講義が単調 / 早いので要旨がつかめない / 字をきれいに / マイクを使って / 魅力的な授業が少ない / 先生によって興味を失う〉というのは、1年生。

2年生になると、コメントが具体的、複雑になる。〈難しくても分かりやすいのはよいが、簡単でもおもしろくないものはダメ / 準備不足の人もいて、ノートがまとめられずに苦労した / 内容にまとまりがなく薄い。しっかりした内容を / 学科所属に影響を持つから魅力的になるように工夫すべき / 勉強しても単位がとれない。細切れ、中途半端〉〈1年目はクーリング・オフの期間。何もしなかったが、1年目の授業がたいしたものではなかったので助かった。専門が入っていたら、“わからない地獄”に入った〉というのものもある。

3、4年生になると、反省が出て来る。〈3年生になって重要性に気づいた。出席できるように時間割に配慮〉や〈おもしろくはなかったが、学科を選択する上では有益 / 広い範囲の勉強が出来る / 幅広い知識が得られた〉など。

科目や担当者に対するコメントも多いが、特に一つの科目や担当者に集中していることはない。水準については、〈内容が高度、テストも難しい〉(1年生)というのが、平均的であるように思われる。教室の狭さや大人数に対する不満も多い。最低3科目必修に関しては、〈自分が所属

しない学科の科目以外は無意味〉（3年生）という意見もあるが、全般的な意見ではない。

学生が学科を選択する際に〈学科の勉強をするため〉という回答が、68%にも達しているが、選択の基準に基礎教育科目がかなり重要な役割を果たしていることは間違いがないように思われる。〈担当する先生によって講義内容は、興味を抱かせるのにかなり差があるように思われる。それがまた志望学科選択の際の大きな基準となっている〉（4年生）したがって、〈インパクトのある先生を配置すべき〉（3年生）という意見となって表れている。この点は各学科とも十分に注意をしておいた方がよい。

一般教育科目

(5) 人文科学系

一般教育科目の中では満足度が高いが、積極的な評価は次のような理由によると思われる。

(1)授業の内容がおもしろい(2)もともと人文系の科目に興味を持っている学生は、この分野を好む傾向にある(3)少人数クラス（レポートの提出を求められたが、その後の勉強に非常に有益だった）(4)教材にビデオを使ったり、実験を行っている科目も評価が高い。

反対に不満は、〈声が聞こえない／板書の字が読みづらい／成績の評価基準が不明、公開すべき／新鮮さが無い／先生が一人で授業をしている〉というような教授方に関するものから、〈卒業に必要なから仕方なく受けている〉という学生の消極的な態度に起因したものまで広い。

〈一般教育科目全般に開講科目数・種類が少なく選択幅が狭い（2年生）／一般教育ゼミを増やすべき〉という意見の一方で、〈一般教育科目が多すぎ、専門を1、2年に〉という意見もある。

(6) 社会科学系

この分野は、学生の反応が大きく、意見も分かれている。〈おもしろい〉というコメントは大変多い。その他、〈考えさせられる／現代的だから有益／大学らしい／世界や日本のことを知る機会／（1年生）／教養が身についた／自分の意見を求められる〉というのは、積極的な評価である。他方で、〈先生の考えを押し付けられる／先生の意見か一般論か分からない／もっと体系的でスタンダードな授業を／先生の好きなことでなく、公務員試験に直結する授業を／偏っている〉という意見もある。レポートについては、「面倒」という学生もいるが、有益だと感じているようだ〈レポートを書くにしても具体的にどこが悪く、どこが良いと見てから、返却して最終的なレポートを仕上げていく方法はすごくいいと思った（4年生）／授業はつまらないが、レポートで自分の興味のあることができて楽しかった（4年生）〉など。ここでも成績評価についての不満があり、〈単位取得が困難〉とともに〈成績評価は公表すべ

き〉という要求があるのを書いておく。非常勤講師による社会科学概論については、評判はよい。

(7) 自然科学系

〈必要がない／文系の大学なのになぜ／卒業のために義務として出席〉などの意見は多数ある。また一般教育科目の中では、〈高校の延長、繰り返し〉というコメントも際だって多い。しかし、他方で〈文系人間だが良くわかった〉（2年生）や〈高校と違い深く狭いのでおもしろかった（3年生）／高校とは違う勉強が出来ておもしろかった〉（4年生）という意見もある。同じ科目でも〈良く分かる〉という意見と〈分からない〉という相反するコメントが表明されている1年次配当科目がある。結局学生の興味や高校での学習の有無などによってずいぶん受け取り方が違うというのが、全体的な印象である〈高校で習っている人にとっては不十分、習っていない人にとっては、週1は少なすぎる（3年生）〉

ただ、かなりの学生が評価しているのは、生物のウニの実習で、〈続けて欲しい〉という要望は多い。それ以外の要望には、〈地学を希望（1年生）／自然科学概論を毎年開講して／一般教養的な生活に密着した授業を（学生によってレベルが違う）／もっと実験を／科目が少なすぎる（以上2年生）／スライドを使って（4年生）〉など。他の一般教育科目には多く見られた成績評価に関する不満が一つもないのは、学問の性格に因るのだろうか。

以上一般教育科目に関する学生の意見をまとめてみたが、専門科目を教えている立場から見て、改めて一般教育科目の教育の難しさを感じる。一般教育科目に対する学生の、必ずしも顕在化していないかもしれないが、底流にある認識は、ある学生の次の意見に集約されるであろう。〈一般教育科目すべてに言えることだと思うが、専門と違ってそれなりにしか勉強できないので、どうもあまり大きな満足が得られない。いたずらに時間をとられる。個人的には一般教育制度そのものに疑問を感じる／一般教育は「大学生として最低限の、各分野におけるバランスのとれた知識」のため必要だというのはたてまえにしかなくていけない気がする。やるならきちんとやるべきだし、でも本当は学生は専門を勉強したくて大学に入ってきている（少なくとも自分は）のだから、それなりの一般教育にいたずらに時間を割くのはつまらない（同じ学生、2年生）〉。

とはいっても、授業によっては深い印象を抱いている学生もいる。評価は様々であるが、学生自身の傾向や授業に対する態度が評価に影響を与えているし、工夫された授業にはよい印象を抱いている。また個性的な授業に対しては、ポジティブにせよネガティブにせよ、学生は強い印象を持ち、反応している。

専 門 科 目

(8) 経済学科科目

全般的に難しいと感じている学生が多いようだ。特に2年生に多い。〈グラフや計算がづらい / 聞いている分にはおもしろいが、テストは難しい / 2年の科目は初心者には難しい〉など。もちろん個別の講義に対して、〈熱心でおもしろい〉と述べる学生もいるが、他方で〈語り口がつまらない〉というコメントもある。3年生になると、多少変化が出てきて、〈分かりやすく説明する先生と分からないまま進む先生とがいる。極端だ〉〈概論からミクロ・マクロへのステップが大きすぎる。じっくり教えてほしい / 熱心な先生が多い / 板書が良い。後で復習できる / 教え方が丁寧 / はっきりしている / 内容が多岐にわたり、講師も充実〉などのプラスの評価も増えてくる。全般的に、学生は理論的な科目に対しては、〈抽象的でわかりにくい〉と思い、現実的な問題を扱う題材には興味を持つようだ。〈世界の動きと結びついてよい(4年生) / 現実問題に対する講義が少ない。実践的な内容を(2年生) / 経済学がおもしろく、実社会の仕組みについて理解できた(4年生)〉。また〈1年の時から開講〉という希望もある。

(9) 商学科科目

特に集中した意見はないが、比較的多いのは講義の方法についての不満である。〈何をやっているのかわからない / 何を言っているのかわからない / 内容は魅力的だが、講義はもう一つ / ただノートをとらせるだけ〉。また既に学科選択の動機のところでもふれたが、この学科は相対的に単位の取得が容易だと見ているようだ。学生が評価している点は、国際的な話題に触れる現実的な内容の授業や実務的な資格試験に直結する授業〈資格取得に有益(4年生)〉などで、要望もその方向に沿っているものが多い〈企業戦略・経営戦略の科目、具体的なケース・スタディを(4年生)〉。商学科は本学ではもっとも実社会に近い学科であると思われるが、それでも学生は不十分と見ているのだろうか。ただし、〈実践的なものとそうでない(歴史的なもの)が両方あるのでよい〉(2年生)と釣合がとれていると見る学生もいる。しかし、他方で〈商大を代表する学科だが学問という感じではなかった〉(4年生)という厳しい意見もある。

(10) 企業法学科科目

この学科には、学生、特に2年生が一様に〈わかりやすい〉と絶賛する授業がある。他方で、〈話し方が早いのでノートが取れない / 声が低いのでマイクを使って / 機械的な説明、教科書の棒読み / 一人よがり、わからない〉など講義方法に対する不満もある。〈素人にはやや難しいかもしれない〉(2年、企業法学科)と心配をしてくれる学生もいて、〈ただでさえ難しいのから、身近なテーマを取り上げて〉(3年生)とか〈講義に工夫をして欲しい(プリント、OHP、板書などに) / 全体的に学説や論理の説明が多く、日常的なことを増やしてほしい〉という要望も

多い。評価する学生の意見は、〈どの先生も論理の筋道が通って大変よい（2年生）／商大の中ではもっとも充実／独自の考えを話すからよい（以上3年生）／国家試験に有益（4年生）〉など。〈へたな私大法学部よりいい〉というようなコメントもある。カリキュラムの整備を望む声もある〈刑法1科目、民法2科目だけでは無理（2年生）〉。4年生に〈どの講義も個別的・独立的で、科目間の相互交流・協力関係が希薄。一方的な講義、学生と教官のコミュニケーションが希薄〉と批判する学生がいる。他には〈政治系統科目がないのが残念〉（2年生）や時間割の問題〔公務員試験の科目が重なっている〕の指摘など。

(1) 社会情報学科

2年生に不満度が高いことを反映してか、〈他学科の学生には難しすぎる／詳しい説明を／概論をやっていないとわからない〉というような意見が多くみられる。3年になると、〈難しいがおもしろい／コンピュータは楽しい〉というコメントが出て来るが、もっとも多いプラスの評価は「実習」に対してである。3年生の中には実習がよいという学生は多くいるし、4年生の中には〈大変だったがよい思い出／大変だが勉強になった〉と回顧的に語る学生もいる。しかし、実習室のスペースに対する不満〈教室が狭い。実習の説明が不足〉や講義の進め方に対する疑問〈一度にいろんな言語を理解できるだろうか。パソコン学習はマンツーマンで教えてくれる人がいないと、出来ない人にとってはつらい（4年生）／どの言語も半年しかしない。中途半端／情報処理関係の科目の相互間の関連性がなく、中途半端（3年生）〉も示されている。

コンピューター関係の授業が想像よりも少ないと思っている学生がいる反面、これらに嫌悪感を示している学生もいる〈期待はずれ。「パソコンや数学がこの学科のすべてではない」という言葉を信じたい。プログラムはうんざり（2年生）／コンピューターを使いたくないが、使わざるを得ない／講義科目が類似、専門学校に来ているという感じ（3年生）〉。学科に所属する前に、予想していた内容と違っていることで、後悔している学生もいるようだ。〈入ってから自分の興味と異なることがわかった／学科決定の前に自分の勉強を決めるべきだった／思ったよりも実際的でなかった。無難に商学科にすべきだった（以上3年生）〉など。

これ以外に、授業の内容〈授業が分からなかったが、図書館で本を読んだらすぐ分かった〉や単位認定に関する不満、〈わからないが6単位はいい〉（3年生）というコメントも多い。〈組織と情報のような科目を増やして／幅の広い学科を期待〉という希望がある。

社会情報学科は基本的に技術的な傾向が強いために、学生自身による実習の積み重ねが必要であり、それに対応できた学生と出来なかった学生とでは自ずから評価や意見に違いが出て来るのかもしれない。評価や意見を見る上ではこの点を考慮することが必要であるが、それと同時に学科に所属する前に学科の授業内容を学生に十分に知らせる必要があると思う。

(2) 商業教員養成課程科目

さきに指摘したように対象科目群名を明確に指示しなかったために、回答に曖昧さが残るが、ここで意図しているのは「教職科目」に対する評価である。意見は非常に少ない。プラスの評価から引用すると、〈自分をもっとも興味のあるところだし、所属する学科でもあるので、一応すべてに満足している／カウンセリングを習って人の気持ちをわかることが大切だと思った〉などがある。他方批判的なコメントには、〈声が聞こえない〉〈問題や題材はおもしろいが、講義はおもしろくない。質を高く／内容に工夫を。興味深く／ディスカッションをさせるクラスは良いが、他はただ座っているだけで、はっきりいってくだらない〉（以上3年生）という意見と、〈ためになる教材が多かった。しかし、実際に中・高校教員の授業を増やす方が、質のよい教員が養成できるのではないか（4年生）〉や〈practicalではない。実際教員になったときにクラスのだんなものが必要になるか、その必要性が感じられない。授業の内容が時々、先生方の趣味に基づいているように思われることがある（3年生）／教育採用試験の内容に対応していない（4年生）〉という実践的な内容を求める意見がある。

(13) ゼミナール

〈教官が熱心。博識／非常に勉強になった。もっといろいろなことを知りたかった〉〈自分は今学んでいるんだという実感がわいてきて、大学の中では一番よかった／ゼミの始まる3、4年は真剣に勉強できるから面白い／毎回レポートで大変だが、勉強が出来る〉という学習面での評価以外に、〈グループ研究が楽しい／友人が出来る／楽しい／先生と親しくなれた〉というように学習以外の面でゼミの利点を指摘する学生も多い。

批判的な意見には、〈ゼミはもっと勉強するところだと思っていた。実際やっていることは全然ためになっていない。もっと現実社会にそった学問をしたい。（「理論」は講義で習うのだから、それが現実生活でどう生かされているのか、という“理論の応用”についての勉強がしたいです）／遊びだけのゼミは止めた方がよい／ゼミ間で差がありすぎる／先生によって違いがあるが、専門的でもほりさげてもいない／ゼミ生でなければ聞けないような話をしてほしい〉。また、〈説明するだけ。学生の理解度を考慮していない／基礎の基礎をやってほしい〉など全体に難しいという意見も特に社会情報学科に見られる。またここでは、学生たちも自省しており、〈改善すべきは学生／ゼミ生にやるきなし／学生の勉強が足りない／自分の努力が足りない〉などがある。

学生たちの要望には次のようなものがある。〈2年からあってもよい／合同ゼミなどあれば／他の教官を少人数で聞く機会が欲しい。専門について話してもらえただけでよい／一般教養ゼミの種類を増やして欲しい／実践学習や見学など〉など。その他、ゼミ室（特に暖房）についての不満も多い。

8. 学生が望む授業とは

学生たちが望んでいる授業とはどのようなものか、编者なりに纏めれば次のようになるであろう。

(1) 理解できる、おもしろい授業

まず授業の内容がよく理解でき、しかも工夫されていて興味を持続できる授業である。内容がよく理解できる為には、声が聞こえ黒板の字が読め、しかも論旨が明快で何が話題となっているのか把握できなければならない。これは基本的なことである。さらに科目やテーマによっては、ビデオや映画を見せたり、実験や実習、あるいは見学などを行うことは有効かもしれない。もちろん、理解を容易にするためにレベルを下げることは求めている。体系的に構成されている分野では、基礎教育を重視して、4年になってやっと概論が理解できるような状態は避けるべきである。

(2) 実践的・実地的な授業

語学授業に対する学生の要望の多くが示しているように、学生たちは実践的な授業を求めている。英語の授業がつまらないという声は本学だけではなく、また最近の現象でもない（「大学英语に改革の兆し」日本経済新聞、1993. 8. 14）。しかし、近年コミュニケーションを重視した授業が多くの大学で模索され始めている（英語検定試験の単位化—お茶の水大学／様々なテーマのビデオを教材に使う—東京大学／能力別クラス編成—筑波大学など）。

また一般教育や専門科目でも、学生たちは実際の社会とどう関わりがあるのか、という観点から講義を見る傾向が強い。したがって理論的な分野は抽象的すぎると敬遠されがちである。しかし理論的な分野であっても社会科学であれば、対象は社会である。身近な話題から始めてほしいという学生の声は、当然であると思う。

(3) 相互交流のできる授業

一方的に話して終わる授業は、特にそれが比較的少人数であれば、不満であるようだ。また意見を押し付けられると感じたり、束縛されると感じる授業を嫌う傾向にある。それに対して、ゼミや少人数の授業は評価が高い。これは自分たちも参加できること、気楽に意見を述べられること、そして私的な交流がいくらかでも出来るためであろう。最後の点は特に重要であると思う。

(4) 多様性と選択の自由を

学生にとって理想的なのはいろいろな科目が開講されていて、その中から自分の興味にしたがって選択できることであろう。一般教育科目の種類が少ないことに対する不満、語学や体育のクラスが選択できないことに対する不満は、大きい。語学を中心とする出席重視という姿勢も学

生には評判が悪い。〈良い授業は学生の出席にこだわらず、その科目が理解されることを重視するもの、悪い授業は出席にこだわるあまり、その科目を理解してもらおうという点がおざなりになるもの〉（3年生）。教育の放棄につながらず、学生の自主性を重んじることは出来ないだろうか。

9. お わ り に

最後にこのようなアンケートの試みに対する学生の意見を記して終わることにする。

〈最近の学生は勉強もせず後から着席するというが、おもしろい授業はたとえ何講目にやっても、前から着席し、私語もしない。学生は良い授業にうえていると思う。このようなアンケートは毎年やってほしいと思う／教授は学生の率直な意見をもっと聞くべきだと思う。授業の中でアンケートをやっても出席がわりなのだから、どの学生も本当の意見を書くはずがない。評定が決まった後、1年を通してその授業、先生に対する意見を学生が率直に伝えることができるアンケートが必要であると思う〉（2年生）

〈こういうアンケートは、一方通行になりがちな授業を見直すのに、大変重要なものであると思う。より良い授業のためにも、学生がこういうふうに自由に思っていることを言えるチャンスというものは必要だ。選択肢がもっと具体的だったり、質問がもっと細かい方がいいかもしれない〉（2年生）

